〔新刊紹介〕

佐多稲子研究会編『くれない』第13号

松原大介

『くれない』は一九六九年から続く佐多稲子とその文学の研究雑誌であり、多くの重要な論考や証言が掲載されてきた。第一〇号からは佐多の手帳の翻刻を掲載しているが、ここで紹介する第13号は頁の全てが手帳の翻刻・註・解題に費やされた、まさに「研究会の総力を挙げて取り組」んだ号（三頁、谷口氏）となっている。

立命館大学日本文学会会員の野田氏や鳥木氏も参加されている手帳翻刻の、手帳の年代と翻刻・註・解題担当者を次に示す。

一九六七年・野田敦子／一九六八年・伊原美好／一九六九年・鳥木圭太／一九七〇年・小林美恵子／一九七一年・谷口絹枝／一九七二年・矢澤美佐紀／一九七三年・五十嵐福子／一九七四年・小林裕子。

八年分の手帳には「文芸春秋社発行の『文芸手帖』と岩波書店発行の『日記』のどちらかが使用され」、「手の平に乗る小型の」手帳に書かれた「ペン書きによる小さな字」は「判読が容易ではない個所が多い」という（同前）。二種の手帳に書かれた佐多の字の一部は誌面でも確認できる。

手帳の内容は国内外の事件への見解や人間関係上の苦悩、文学作品の感想など多岐にわたるが、中心は日常生活の記述であり、そこには佐多のナマの感情を垣間見ることができる。家族との遊びや旅行に観劇と多趣味な佐多だが、中でも興味深いのはテレビをよく見ていることである。佐多は角力やテレビドラマを楽しむ他に、七一年七月のニクソン訪中をテレビで知り「大事件なり」と書き、七三年一月のベトナム戦争和平調印を衛星中継で見て「ベトナム人民の抵抗は人間の信頼」を「世界中におしえた」と綴る。一九六九年七月のアポロ11号発射のニュースに「人間の力」を見出し、数日後に着陸の場面をテレビで見た佐多が「人間のえらさ」「ひとりひとりの人間に対する尊重」を感じているのも面白い。

テレビ以外にも新聞、電話や手紙で佐多は知人の訃報、周囲の政治的状況、自身の作品への評価を知り、それを記している。折々の読書の感想も記されており、例えば倉橋由美子「スミヤキストQの冒険」への「才能はおどろくべきものなれど発意テーマはおどろくものでなし」「感動なし」といった冷静な批評も注目される。

日常の記述に溢れたこの手帳は、佐多稲子やその文学、また一九六〇～七〇年代の政治的・文化的状況を理解する貴重な資料でもある。翻刻に付された詳細な註と解題は必ずやその助けとなるだろう。佐多稲子研究者だけでなく、当時を知ろうとする者にとって必読の資料である。

（佐多稲子研究会　二〇二一年七月　三四三頁）

（まつばら・だいすけ　本学大学院博士課程後期課程）